

今週の為替相場見通し(2021年8月23日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		109.12 ~ 110.22	109.79	109.00 ~ 111.00
ユーロ	(ドル)		1.1664 ~ 1.1800	1.1699	1.1600 ~ 1.1750
(1ユーロ=)	(円)		127.94 ~ 129.35	128.48	127.00 ~ 129.50
英ポンド	(ドル)		1.3602 ~ 1.3877	1.3620	1.3450 ~ 1.3670
(1英ポンド=)	(円)	*	149.19 ~ 152.21	149.57	148.00 ~ 151.00
豪ドル	(ドル)		0.7107 ~ 0.7373	0.7138	0.7050 ~ 0.7250
(1豪ドル=)	(円)	*	77.90 ~ 80.88	78.37	77.10 ~ 79.60

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 玉井 美季子

(1) 今週の予想レンジ: 109.00 ~ 111.00 円

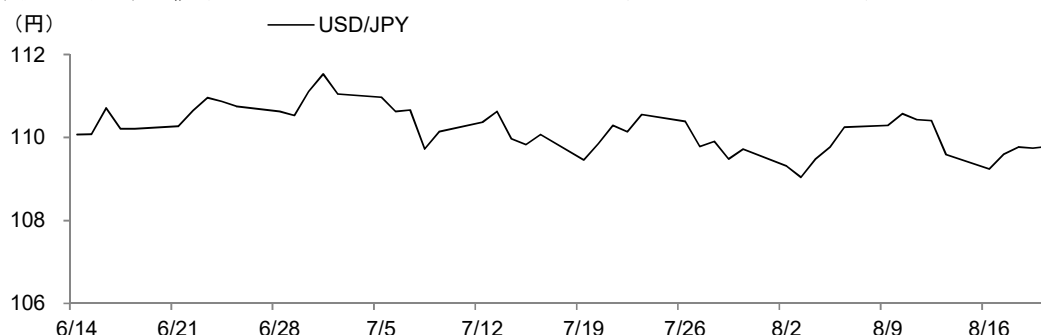
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は週後半に高値をつけた。週初16日、109.60円付近でオープンしたドル/円はドル売りが継続し、じり安の展開。海外時間もその流れは変わらず、8月NY連銀製造業景気指数が事前予想を大幅に下回ったことやアフガニスタン情勢を巡る懸念を背景としたリスク回避の円買いが強まり、週安値の109.12円まで続落した。17日、リスク回避地合いが継続し109円台前半での横ばいだったが、その後は米金利上昇を受けたドル買いや対欧州通貨でドル買いが進んだことを受けて上昇し、109円台半ばまで上昇した。18日、109円台半ばを中心に狭いレンジで推移するも、海外時間で米金利が上昇する中、FOMC議事要旨を控えたポジション調整から110円台前半まで回復。その後、FOMC議事要旨ではハト派寄りな内容が示されると、ドル/円は下落に転じ、再び109円台後半まで押し戻された。19日は仲値にかけて値を上げて一時週高値の110.22円をつけるも、その後は米金利の低下を受けて109円半ばまで反落した。20日は特段目立った材料のない中、109円台半ば付近での取引が続いた。米国時間に米金利上昇とともに109.87円をつけたが伸び悩みそのまま109.80円付近でクローズした。

今週のドル/円は底堅い推移を予想する。今週は27日(金)にジャクソンホール経済シンポジウムが開催されパウエルFRB議長の講演が予定されており、パウエル議長からテーバリングに関して詳細の発表があるか否かが注目される。週後半にビックイベントを控えていることから、週前半のドル/円は動きづらく様子見姿勢が続くそう。足元新型コロナウイルスのデルタ株感染拡大が懸念されているものの、ドル/円についてはリスクオフのドル買いと円買いに挟まれて動きづらい状況だ。一方、ジャクソンホールにてパウエル議長からテーバリングの詳細が発表される場合は、米金利上昇を受けたドル買いに繋がると考えられ、いずれにしてもドル売りに繋がる要素はなく、ドル/円は底堅い動きを予想する。ただ、先日公表されたFOMC議事要旨において労働市場の状況について著しい発展をまだ達成できていないとしており、次回の雇用統計を見てからでないとテーバリングの具体的な時期等について発表されない可能性がある。その場合、ジャクソンホール後は期待感剥落から下落する動きには注意したい。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/9~8/13)の値動き: 安値 109.12 円 高値 110.22 円 終値 109.79 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 大谷 未央

(1) 今週の予想レンジ: 1.1600 ~ 1.1750 127.00 ~ 129.50 円

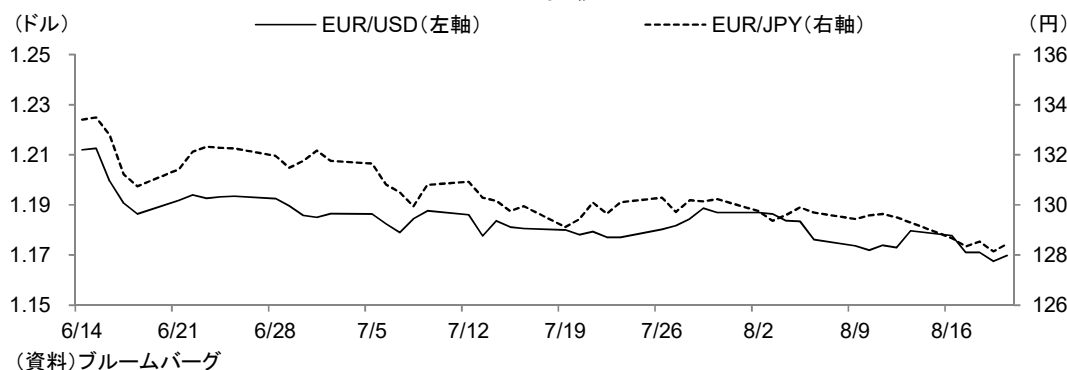
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は下落し、年初来安値をつける展開。週初16日1.1795でオープンしたユーロ/ドルはアジア時間に週高値の1.1800まで上昇。その後アフガン情勢を巡る地政学リスク等が意識されたリスクオフの円買いを受けたユーロ/円に連れ安となり、1.17台後半まで下落。翌17日は海外時間に米金利上昇に伴うドル買い圧力に押されて1.17付近まで下落。18日はFOMC議事要旨発表にかけてドル買いが強まり、昨年11月以来となる1.17を割り込んだものの、発表後は買い戻され1.17台半ばまで値を戻した。19日は米株安を意識したリスク回避のドル買いに押され1.1666まで下落し、連日年初来安値を更新する展開が続いた。20日は前日の流れを引き継ぎ週安値である1.1664まで下落する場面も見られたが、その後はユーロ/円の上昇にサポートされ1.17付近まで上昇し、1.1699で越週した。対円では、週初16日129.20円台でオープンしたユーロ/円は、アフガン情勢を巡るリスク回避の円買いを受けて128.50円台まで下落し、翌17日も上値重い推移が継続。18日はFOMC議事要旨発表にかけて米金利が上昇する中、円売りとなりユーロ/円は128.70円台までじりじりと上昇し、発表後に一時的に128.90円台まで上昇幅を広げる場面も見られた。しかし、その後は欧州株が下落したことを受けて128.50円台まで下落。19日は欧州株の下げ幅が拡大したほか、原油安・米金利低下が進んだことから、リスクオフの円買い優勢の流れとなり、週安値である127.94円まで下落。20日は前日からの流れで上値重く推移したものの海外時間に米国株の堅調推移を受けユーロ/円は128.40円台まで上昇し越週した。

今週のユーロ/ドルは上値重く推移すると予想。今週は27日(金)にジャクソンホール会合が予定されており、マーケットの注目が集まる。7月FOMC議事要旨の内容を受け、FRBが年内のテーパリングへの着手との見方が強まる一方、ECBは7月会合において緩和的な政策を維持するようフォワードガイダンスを変更しており、金融政策のスタンスは反対方向を指し示している。コロナデルタ株の蔓延が収まらない中、ECBが政策スタンスを変更するとは思えず、今回のジャクソンホール会合においても「テーパリングは時期尚早」とのメッセージを発信し、改めて政策スタンスの差が意識されユーロが売られる展開を予想する。重要指標の発表は、23日(月)にユーロ圏8月製造業/サービス業PMI(速報)、ユーロ圏8月消費者信頼感指数、25日(水)に独8月IFO企業景況感指数、26日(木)ユーロ圏ECB政策理事会議事要旨(7月会合分)の発表を予定している。

(3) 先週までの相場の推移

先週(8/9~8/13)の値動き: (対ドル) 安値 1.1664 高値 1.1800 終値 1.1699
(対円) 安値 127.94 高値 129.35 終値 128.48



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.3450 ~ 1.3670 148.00 ~ 151.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、想定外に一方的な下落。この間の通貨市場では、ドル全面安と言える動きが観察されていたので、対ドルでのポンド安の大半は、ドル高で説明することができただろう。ただし、特に19日以降、ポンドは対円、対ユーロなどでも明確に下げ足を強めており、そこに、なんらかのポンド安要因の存在を想定できた。ドル高の要因は、世界景気の先行き不透明感の広がりに伴う「リスク回避」と説明された。①16日に発表された中国の7月小売売上高や同鉱工業生産が市場予想を下振れたこと ②18日に公表された米連銀7月公開市場委員会議事録が、「参加者の大半が年内の金融緩和縮小（テーパリング）開始が適切と判断」といった内容を明らかにしたことなどに加え ③アフガニスタン情勢を巡る不透明感などが、リスク回避の流れを形成した。並行して円高の動きも読み取れたのも、市場の、こうしたリスク回避姿勢の強まりの表れと言えただろう。②は直接ドル押し上げ要因と読むこともできたし、③については、「有事のドル買い」などを持ち出す解説も聞かれた。一方で、ポンド全面安の要因だが、英7月CPIの下振れ（18日）や同小売売上高の低迷（20日）など英経済指標の不調がポンドの重石になった可能性は十分に考えられただろう。もうひとつ、19日付英紙が、ラーブ外相の「失態」を報道、同相の辞任観測が強まったことなども、ポンドの下振れを誘う要因になったものと考えられた。同相は、10日の時点でアフガニスタンのアトマル外相からの電話に、休暇先のギリシャで応対することを拒否、配下の者に対応を任せたとした。

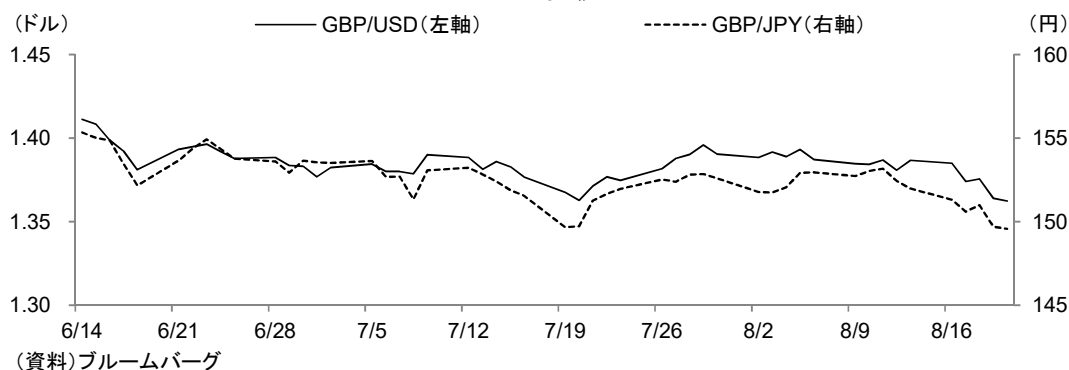
今週の英ポンド相場は、足下方向感の継続＝続落を予想。対ドルでの直近安値（7月20日の1.35725）や対円の直近安値（同148.44）が手の届く距離に迫っており、こうした水準を次々に割り込んで、取引水準を一段切り下げる可能性を中心に想定する。現在までラーブ外相は自らの辞任を否定しているものの、世界中の耳目がアフガニスタン情勢に集まる中、決定的な判断ミスを犯したことは間違いないだろう。現在の英ジョンソン政権では、6月に、「社会的距離の確保を怠った（実態は不倫疑惑）」との理由で、ハンコック保健相が辞任に追い込まれたばかり。昨年3月に始めた猛烈な財政ばら撒きの收拾を迫られるスナック財務相への世間の風当たりも強く、内閣に対する国民の信頼が高いとは言えない（残念ながら、野党側が、与党の失点を自らの加点として活かしてないのだけは、ジョンソン首相の幸運と言えるか）。英景気動向に直接影響するような性質の問題ではないものの、ポンドにとって、少なくとも好要因とは言えないだろう。先週（17日）発表された英4～6月平均賃金は前年比+8.8%と、統計を遡れる2001年以降で最高の伸びを示したものの、市場の関心は低く、上述、英7月CPI、同小売売上高の低迷を受け、一度は盛り上がった英中銀による早期金融緩和縮小観測も、当面はなりを潜める可能性が高いものと思われる。対照的に、今週27日（金）に予定されるカンザスシティ連銀経済シンポジウム（ジャクソンホール）を前に、米連銀による早期金融緩和縮小期待が高まっている感が強いことは、ドル高に振れ易い地合の継続を見させる。他に、今週、英経済指標では、23日（月）に、英各種PMIの8月暫定値などの発表が予定されるが、現状、景況感を示す先行指標に、市場が大きな関心を示す可能性が高いとは思えない。

(3) 先週までの相場の推移

先週（8/9～8/13）の値動き:

(対ドル) 安値 1.3602 高値 1.3877 終値 1.3620

(対円) 安値 149.19 高値 152.21 終値 149.57



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 安藤 愛

(1) 今週の予想レンジ: 0.7050 ~ 0.7250 77.10 ~ 79.60 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は0.71台まで急落。16日、週末に発表されたNSW全域でのロックダウン強化を嫌気しオープン後から軟調に推移。更に、中国7月小売売上高および鉱工業生産がともに前月から鈍化し市場予想を下回ったことを受け、豪ドルは更に下値を追う展開となり一時0.73台前半まで下落。17日、この日発表された8月RBA議事要旨では、今後ロックダウンが景気後退を悪化させるようなことがあれば、政策面で行動をとる用意があるとし、今後のテーパリング見直しの可能性が示唆されていた。これを受けて豪国債利回りがほぼ全ての年限で低下し、豪ドルは売りで反応。更にニュージーランドにてCOVID市中感染者が1名確認されたとの報道を受けてNZDが急落する中、豪ドルも連れ安となり年初来安値0.7290を下抜け。その後、弱い米7月小売売上高の結果を受けて株価が大きく下落すると豪ドルも更に下値圧力がかかり、一時昨年11月来の安値0.7243を付けた。18日、この日のRBNZ会合では前日のニュージーランド全土ロックダウンを受けて、政策金利据え置きが決定されたが、今年第4四半期以降の利上げ見通しを維持した。RBNZ発表後、NZドルは売りで反応したもの、すぐに全値戻し、豪ドルへの影響も限定的であった。FOMC議事要旨ではメンバーの大半が年内のテーパリング開始について前向きであることが確認され、株価が下落幅を拡大する中、豪ドルは頭を押さえられ0.7230近辺で引けた。19日、この日発表された豪7月雇用統計は失業率が4.6%に改善し、雇用者数変化も市場予想ほど悪化しなかった。これを受けて豪ドルは小幅上昇したものの勢いに欠け、すぐに下落。NSW州コロナ感染者が2日連続で過去最高多を記録する中、鉄鉱石価格下落等も背景に、豪ドルは下値を追う展開となり、10カ月ぶり安0.7143を付けた。前日のFOMC議事録にて早期テーパリングを示唆する内容が出てきたことで米ドル高が進行したことも、豪ドルの重しとなった。20日、NSW州ロックダウンが9月末まで延長との報道を背景に、軟調な値動きが続き一時10カ月来安値0.7107を記録。欧米時間に入り株価が上昇に反転する中、豪ドルも下げ止まり0.7130近辺まで戻して越週。

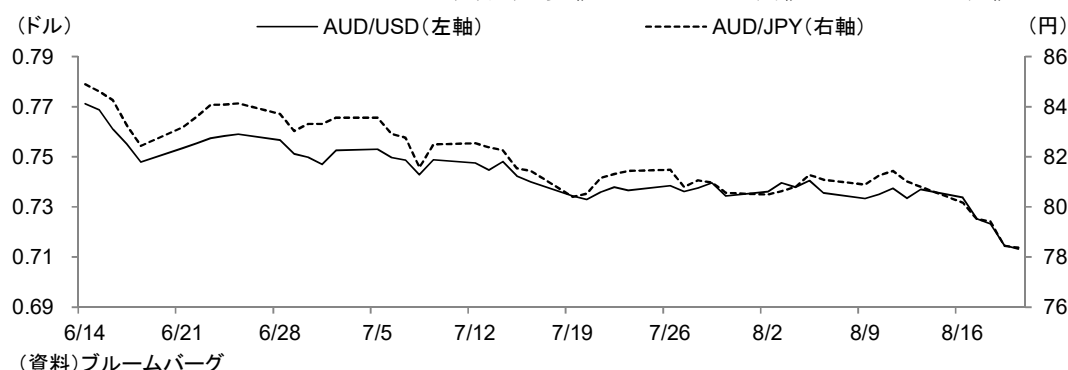
今週の豪ドルは方向感に欠ける値動きを予想。豪州ではコロナ新規感染者の増加が止まらず、シドニーロックダウンは9月末まで延長が決定。豪7月雇用統計は強い数字となったものの豪ドルは下げ止まらず、豪州国内のリスクセンチメント悪化が重しとなっている。一方、デルタ株感染拡大は米国でも一部地域で深刻化しており、市場が既に織り込むテーパリングスケジュールが後ずれする可能性についても意識せざるを得ない状況。かかる状況、週末のパウエルFRB議長講演に注目が集まっており、それまでは方向感の出にくい相場展開となろう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(8/9~8/13)の値動き:

(対ドル) 安値 0.7107 高値 0.7373 終値 0.7138

(対円) 安値 77.90 高値 80.88 終値 78.37



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。